

平たく楕円形。奥行きで二〇cm、幅が四〇cmくらいか。

その石には緩やかにうねりがあり、ミニチュアの丘陵のようでもあった。

一部、石の膚が浅く削られ、平滑に整形されている。四角く凹んだその平滑部分には文が刻まれ、額のようなであった。墓碑銘なくば人の眼には埋もれかけた自然の石としてしか映らなかったであろう。

私の遺骨がその下に納まっている。

そうでなくば私にしてもなんら意味を覚えなかったであろう。錆色の苔が生じ、痩せた草に隠され、乾いた土壌に同化している。独り身を九十七の歳まで生き、歿して幾許も経ていないが、既に墓参者は皆無であった。孫や玄孫がいようが、並の人間なら数十年後には同じ運命をたどる。二千万年後には今いる生物のあらかたがいなくなる。

人はなにを求めて生きるものであろうか。葬佐^{いさ}と云う姓、クラシコ・イタリアを着た早蕨^{さわわび}と云う名の男であった私は平河町を蕭々たる雨に降られ、コートの手立てて寄せながら速歩きし、駆け込むように地下鉄に降りた。もう八〇年近く昔のことだ。詠えたスーツをぬらしたくなかった。同じくコルネリアーニから取り寄せたネクタイもまた大事にしていた。

腕時計を見れば既に17:07である。中古で買ったお気に入り文字盤がイタリア・カラツラ産の大理石、シエナ時計塔と同じデザインの針を持つその名も『シエナ』だ。彼早蕨は黒地にかすかに白の縞目模様を選んでいた。

微笑も束の間、頬を締める。いつもよりか退社は一二時間早い。東京駅17:38発に乗らなければならないとなれば話は別だ。

当時、東京駅は第二次大戦の本土空爆で破壊される以前の、ルネッサンス様式のドームを冠した二階建てに復元されたばかりであった。赤煉瓦造りであるところは一貫して変わらぬが。

時速五〇〇kmのリニア新幹線の指定席を既に取ってあった。早蕨が超小型軽量デジタル・ミニージャック・プレイヤーを耳にかぶせ、窓の外を眺める。

遠くかすかに、東京湾上に聳えるハイパー・スカイスクレイパーの山容のような影が泛んでいた。超々高層ビルの群れを、エッフェル塔の鉄骨のように交差する円筒形の通路によつて結び、全体でピラミッド型をなすその巨大建築は高さ二kmを越し、本邦の首都を睥睨する。電脳バビロンの空中都市に喩える向きもある。

雨の調子は強くなってきた。天を覆い尽くし、次々流れる雲は速い。黒さの度合い

も深まるばかりであつた。車輪が柔らかに滑るように動き始める。しなやかな猫科の獣が足音を立てずに歩むに似て、移動の効率を求めるよりも贅沢な時間の濫費を楽しむ錯覚に陥る、その瞬間の、重力や反発力から解放された駆動力のかかり方、その滑らかなさは官能的ですらあつた。

人は畢竟、充たされることを欲する。人は手を尽くして自在を、妨げなく思いの拡がり叶うことを求めている。摩訶般若波羅蜜多心経がその一節に「度一切苦厄」と誦す。『苦』の原語「ドウツカ」は「不如意」の義、すなわち意のままならぬことであり、『苦』と訳したのは実に妙訳で意を尽くしていると言える。まこと人は意のままを求めているのであり、そうでないことは人をして行動に駆り立てる鞭、苦しみなのである。しかしながら、「度一切苦厄」とはなんと途方もないことを叙べていることが。

外は暗く、窓には外景よりか、反射する車内が映えていた。

雨滴が烈しくガラスを撃ち始めている。音と窓面のかすかな衝撃がそれを訴えていた。無理もない。新幹線は東京上を過ぎ去って行った雨雲の大旅団を追い駆けるように疾駆しているのであるから。やがて自動装置機関銃が束になって乱射するような雨になった。音のない灌の下を突き抜けるようだ。

早蕨の普段の住まいは中野であつた。親元を離れ、独りである。実家は某県の真神郡にあつた。実はそこへと向かっているのであるが、季節外れの里帰りではない。セル・ホンを取りだした。F3はブラウザを備え、インターネットに関してはディスクトップ・パソコンに比しても遜色がない、動画編集自在、と謳われたが、さような仕様自体既に時節に合わない感じがぬぐいがたい。だが早蕨は青銅ふうメタリックと呼ばれた飴っぽい赤みがかった金色が気に入っていたし、浮き彫りのアンティーク調も趣味に合致していた。

丸ゴシックの数字を次々プッシュする。

「ええ、もちろんです。鉄道の時刻に合わせましたよ、18:12の特急です。そうするしかありませんから。」

その後は快速とか普通列車ですから、裁量の余地はあります。最悪電車一本乗り遅れたとしてもどうにかかりますからね。しかしまあ、本数の少ない真神線に遅れちゃうと致命的ですがね。

では、神中州で」

彼が電話した相手の名は「普蕭^{ふしやう}」。弓形の眉をして、いつもにらむかのような虫塗家の眼差し、唇を引き結んで顎を突きだし、驕慢な芸術家のふうをした男である。

さて、事象的には六時一分前の新常陸海道駅に着くのであった。

ホームを降りてコーヒー・スタンドで一杯。唇を外套の袖でぬぐい、構内のブック・ストアで岩波文庫の棚の前に止まる。ゲーテ著『イタリア紀行』（上）を購入。別段の意味なし。腕の『シエナ』を閲し、通路を縫い、階段を駈けて特急列車『かすみ』に乗り換えた。横殴る暴雨でプラットホームは荒野のようである。ベルが鳴った。コートに附いた滴が心なしに寒に近くなっている。指定席に身を投じた。

音を立て一度揺れてから車輛が動く。

車窓には街の灯かりがにじんでいた。ぶつかる弾のような感じがいくらか薄らいでいるのは寒に変わり始めたせいだ。バッグから取りだし、ノート・パソコンを開く。B5判サイズ、TVのハードディスク録画など多機能、の割に意外と売れなかった逸品だが、彼は重宝していた。

DVDを入れる。『戦争と平和』五枚組セットの最終巻であった。長大なるエピソード第 一 篇はない。本来その部分がお気に入りであったが、映像では無い物強請りであった。それぞれの分野は交叉しながらもテリトリーがあるところわけだ。世に満ちる滴は時に偏りながらも全体では波寄せて籠もり上がり引き下がる潮汐のように調和している。

今思えば虚しく苦しむ必要はなかったのだが、だれもが生きているうちに解脱してしまうわけには行かないらしい。だから苦しみなければ取って苦しむのも法道、正義である。が、生きているうちには絶対領きたくない真理だ。

三〇分ばかり車内で暖まり、乾いた。雲の間で降りる。風は強いが、雨はすっかり寒になり、バシバシバシやっていた音響はなくなっていた。寒さは水っぽい寒さから底冷えの寒さに変わっている。再び襟を立てて閉じた。高架のホームから雲の間市街を見渡せば駅周辺のビルがすぐに尽きて商店街や民家になっている。コンビニの灯かりや残業しているビルディングの窓、タクシーのヘッド・ライト、デパートの一階に入っているコーヒーショップ、それらがかすむように見えていた。赤提灯が舷灯のように思える。

18:49の快速に乗った。

坐れなかったのも「駅くらい、龍垂涎川の鉄橋を越えるときにはフィリップ・マローウの文庫版を読んでいる。ギムレットが欲しくなって本を閉じた。

栖市の龍栖駅に着く。19:20であった。3番線ホームに移る。栖上州線に乗り換えるのだ。そこで早蕨を待っている男がいる。

その姿と言えば、学生時代から着続けているダウンジャケットに毛糸の帽子を目深か

ぶった無精鬚の男、ベンチで首をすくめながら京本チェーン店の値札が附いた本に蔽いかぶさるよう読み耽る「隆臥」だ。

「最近は何を読んでいるんですか」

早蕨が訊くと隆臥は顔を上げた。

「おお、来たね。しかし、寒いな、今日はまた。

いや、どう云うわけか、マリオ・プーゾオだね。実は『陰翳礼讃』を持って来ようと考えてたんだ。

でも間違えちゃってね。こいつを手にしてしまったんだ」

「本気つか。厚さ、だいぶ違ふと思いますけれど」

二輻面編成の普通列車が来た。同じ前照灯なのだろうけれども、古く小さく懐かしげに見える。

「なに、部屋が暗くてね。実に陰翳礼讃なんだよ。

前のね、龜鹽湖かめしおの傍の貸家と同じでね、古くて暗い民家なんだ、今の棲家も」

「大丈夫ですか。近隣の人に怪しまれていませんか？

先輩みたいに実家から近いところにわざわざ、しかも実家と同じくらい辺鄙な田舎に敢えて家を借りる人、普通いませんからね。

僕らには、ああ、先輩らしいや、風狂だなあって呑気に解釈できるけれども、全然理解しないのが世間の大多数ですからね」

「さあ、どう思われているのかな。しかし、私はのんびりしているよ。
楽なものさ。

未だに勤めていたときの貯金で生活しているしね。ガスも電気も使っていない（と云うよりあの家には通っていないらしい。炭と七輪さ）。家賃は五千円だし、隣の婆さまがおかずを分けてくれるし、農家や山仕事の手伝いやらで十日も働けば手間賃五、六万で飯も附いている。

相変わらず一幅の墨絵のようなくらしや」

「しかし先輩、そのまんまでこれからもいくんですか。

二十二歳で隠棲するって、いくらなんでも早過ぎるんじゃないやありませんか」

「まあなく二十四さ。

いや、そんなことは関係ない。善は急げ。しよあくまぐさ 諸悪莫作。
いずれ、おまえにもわかるや」

「いずれって、歳は一年しか変わらないじゃないですか」

「はは。年齢の問題じゃない。」

おまえだって思うだろう。社会的な成功は人間が自分たちのために作り上げた架空の階級に過ぎない。夢想でしかない。いったい、それに従わなければならないどんな根拠があるんだ。

私はね、このまま行かせてもらうよ。リストラされた六月に隠居を決めたときから既に世捨て人になったんだからね。

親戚も皆、損得を皆言うが、そんなものは幻なんだよ。人間の眼にしか見えない。楽が一番、軽^{かろ}らかなことが肝要、無一文であれば清爽、清爽なれば最善の幸福。存在の意味究明の尖にあるものは幸福を求めることに他ならない。

犬や鰯や雀に聞いて「覽。なにが実在するのか、なにがリアリティなのか」

「今日はその手の話はかりになりそうですかね。真分^{まじやう}さんも来るし」

「まあ、そうさね。御大が来れば、私なんか太陽の前の豆電球だよ。まあ、乗ろう。遅れてもなるまいよ」

車外の風景は暗いばかりだったが、唐突に街の灯かりに入る。これが最後の市街風景だ。ドアが開く。神中州だ。

先述の普蕭が彼らを捜して乗り込むはずだった。三輛編成なので早蕨らは自分らがどの車輛に乗っているかなんて知らせる必要がない。

普蕭は颯爽と乗り込んで、切りそろえてきれいに櫛を入れた髪を気障に振った。

「やあ」

細くて丸い眼鏡の蔭を指でつまみ、位置を直しながら降臥を見て言った。

「おう。おまえも間に合っていたか。少しく心配していたぞ。」

早蕨とは連絡が附いていたから気にしていなかったが、時間感覚を超越しているおまえが携帯を持っていないんだから、全くよくできているもんだ。

世界は全体で見ると限りにおいては、全くよくできているものさ」

神中州にある古本屋『書肆イル・ポリーフィロ』のオーナーである普蕭はアーミーコートに登山靴と云う姿で、早蕨の眼には新鮮に映った。

店舗内でのクラシカルなジャケットの下にチョッキとネクタイと云う姿が、二月に一度BAR『ベッシー』で正装して演奏する姿しか知らない。アウト・ドアな人ではないのだ。ちなみに『ベッシー』とはジャズとブルースしか曲を流さない狭いバーだが、ライブ演

奏を行う。実は今日のメンバーは早蕨を除けば、皆ブルース・バンド『クオドラプル・ヴィー』の仲間で、月に二、三回は楽器屋のスタジオを借りて練習していた。

降臥がブルース・ハープで参加し、普肅はベース。ただし、アコースティックではなく、エレキ・ベースである。

御大がアコースティック・ギターを弾く。

もし彼らが手刷りしたライブのチラシを見るならば、そこにまず見る名は「ベ裂いれつ」、御大の同級生（普肅の二級下でもある）であり、本名はベ太郎だが、彼がその名で呼ばれることはない。なぜベ裂かと言えば彼の家が真神郡一番の旧家、壺之家であり、その家屋敷の背後に真神山と云うこれまた真神郡一帯で敬される山を背負っており、山とは言っても標高で漸く百mぐらい、壺之家屋敷のある山麓から見れば直高五〇mもないくらいだが、その頂に古代の磐代、同地で壺衣いれつと呼ばれ、尊崇されるイの字型の大亀裂が入った大磐があり、ベ太郎彼自身がこれにちなんで自らをベ裂と呼び、人にも呼ばせているのである（作中、ベ裂としか呼ばれないので登場前だが、敢えて申し叙べ置く次第。忝赦。なお、ベがイと読まれているのは実は父親が役場に届けたときの誤記、もしくは悪筆のせいらしく本来は普通に、イ太郎であるはずだったらしい）。彼がストロトキヤスターを鳴らす。次いで真谷と同級のボーカリスト、ベ裂の従兄弟である「哥舞妓かぶき」、普肅の同級で貞観止國寺の倅、ドラマーの「叭羅蜜斗ばらみと」が名を連ねるのである。

『クオドラプル・ヴィー』はその名のとおりそれに先行する『クオドラプル・ヴィー』と云うバンドがあつたのだが、年長の普肅叭羅蜜斗らはその第二期からのメンバーであつた。列車は真つ暗な闇を走る。最後の有人駅、薙久なぐくさ簀駅に到着した。この駅で19:11の真神線まがみに乗り換えるのである。

「雪だね」

降臥が呟いた。降りると氷のような雪が頬を切る。

灯油ストーブの焚かれた待合室に入るまでもなく、一同振り向く。一輛しかない電車が金切音を上げながら入った。

手でドアを開けて飛び込む。故障ではない。真神線の扉は手で開閉しなければならない。車内に車掌がいるが、大概は村のおばさんやおじさんがアルバイトで雇用されているから開けてくれたり閉じてくれたりなんかはしてくれない。

普肅がアドラー社製のスキットルを尻のポケットからだしてターキーを呟った。二人に訊いた。

「やるかね？ 癡^いイタルに乾杯だ」

「イタルくんは伝説ですね」

早蕨のその言葉を継いで普籙は、

「そして俺は生きている」

「言い、キャップの外れたスキットルの口をその思索の眼差しで眺め、現象の先にある世界を見つめる。」

「むろん今日集まるのは明日に控えたイタルの命日のためじゃない。しかし今日真神に集まる連中の中でそれに思いを馳せない奴はいないだろうな。おまえと降臥以外は生きていたころのイタルに会ったことがあるのだから。」

死はどうにもならないんだよ。

しかも全く、以て個人的な体験で、親兄弟でもそこには介入できない。その中に墜ちて行く瞬間の体験の中では、だれしもが独りなのだ。

だがしかし、いったい個人的ではない体験などあるのだろうか。ともに同じく見、理解していると思われるすべてが実は幻想なのではないのか。人は皆、自分の意識するものしか確かめられない。俺は奴がああ緋色の染めた髪を振り乱してギターを鳴らし、喉を絞るように謳う姿が今でもあつたの裏に泛ぶ。奴が俺の心の中で生き続けているとも言えるが、それは事実、俺の自己肯定でしかない。到底、奴の死に追い附くものではない。人はだれも個人の思いに留まり、事実には触れられないのだ。

当時ですら、俺たちになにがわかっていただろうか。

俺たちはまだ十六、七だった

イタルもまた『クオドラプル・ヴィ』、つまり第二期である『クオドラプル・ヴィ』を構成した仲間の一人であった。

「いずれにせよ、昔のことだ」

「いえ、過去と言うよりか、僕らにとっては歴史ですよ。」

彼の路上ライブでのパフォーマンスや凄絶な死は、日常の雑多の掟えられなきが終局し、美しいイデアとして明晰化しています。生が終わり、概念として確立している」

早蕨がそう言うと、普籙は「ふん」と鼻で笑い、また呟る。しばし沈黙してから、スキットルを掲げ、

「これは幸福の薬や」

眩いてキャンプを締める。そして冗談とも取れる造作的な真顔になった。

「むろん戯言だ。」

だから真実でもあり得る。それゆえに幸福の薬なのさ。智慧は女性だ、と言ったのは二―チエだったか（むろんニーチエだ）。ゆえに智慧は戦士を愛する、とね。

彼の『ツアフトウストラ』は潤沢な筋脈、半ば忘れ去られていた徳を思い出させてくれる。あの随所に鑲められた雄々しい謳いの、なんと肯定的なことか。一部はほとんど愚かしいほど（むろん戦略的だ。姦計だ）だ。快活で、明朗で、男らしい。すなわち戦士は顧慮などしないのだ」

再び開け、もう一口、呷った。

「なにを思い煩うべきであろうか。ない。幸福であるか、どうか。それだけが物事の是非を断ずる唯一の判断基準だ。それゆえに幸福であるか、否かの判定は精妙を究めなくてはならない。自己の情態を寸分し、分け入って解析、動機の底を徹底的に閱し尽くし、その上で享受されている幸福が本物がどうかを判定しなくてはならない。

異論があるか。

まさか幸福が最後の証明であること自体に異論はあるまい。それは既にプラトンの時代に明言されている。『饗宴』は読んだぞっ？

諸概念は全て実体を伴わない架空で判断基準たり得ない。我々は諸概念によって考え、閱し、判じている。それはもう意識自体だ。批判も証明も不能、すなわち受諾する以外がない。逆に言えば証拠としての提示に意味がない。

我々に可能な限り遡って直観する原的事実に即せば幸福にしかたどり着かない。そうじやないかね？

幸福、充たされている感覚、肯定的な情態であり、自己肯定が揺るぎなく確信されていること、むろん人はそれを求めて生きるのだ。

端的に言い切ってしまうは、その結果が真実に得られるならばそこまでの経緯や理論の構成はどうでもよいのだ」

龍 呑の無人駅に着いた。

がらんとしたただ吹雪であつた。周囲には民家の灯火が二つ、三つ、白い礫にかき消されかけながら見えるくらいか。あとは盛り上がる森丘のため、漆黒ばかりであつた。雪は積もり始めている。

真神線は単線であるがゆえ、上りも下りも同じ線路、プラットホームは一つしかない。柵もなく崩れかけたコンクリートの台があるだけである。丸太小屋みたいな待合室に錆び切ったベンチが一つあるばかり。そこでかじかみながら猛風の雪の中でどうやって点火したか、トレードマーク（の一つ）であるギヤバッシュ・パイプを震える顎でくわえている、例の御大「真今」がいた。

こんな風の中でもいつもの帽子をかぶっている。傘のように鰐の広い奴で、鉢は田錐形に尖っている、のが原型だったのだが、なん年来かの使用でその尖塔は途中から折れ倒れていた。

よく見れば今晚に限っては黒紐が顎下に回され、帽子は結わい附けられている。鰐が旗めいていた。

「さあ、早く早く」

早蕨と隆臥とがドアを開けた。真今も強風で煽られたコートの裾に脚を絡め取られながら、いつもの飄々たる態度もどこへやら、車内に飛び込んで来た。

「ひやふう、ひやふい、うひやひや。いや、参った。参った。

諸卿、無事かね。いやはや、さすがの小生も凍えた」

そう言いながら顎鬚口髭類群に載った雪を払い落とす。腰まである長髪もかじかんでいるかのよう。良く言えばインドの苦行者、普通に言えば大昔いたヒッピー、悪く言えば路上生活者のふうていだ。秋冬春はいつも同じ蛇腹状にたるんだブーツ。ビンテージ物ではない、古くて破れたリーヴアイス。

その脚を組んで坐り、一息吐いてから、

「で、諸卿、次で降りるから、遺漏なく願いたまう。

よく説明していなかったかもしれないが、哥舞妓くんが迎えのために待っていてくれるはずだ。

目的地は、周知のとおり真神のお山なのだが、例の品が貞観正國寺にあるがゆえに一度畛邸ほむらで降りてお寺に寄ってから、その後また哥舞妓くんの車に乗って真神の壱之家いの邸に向かう計画である。

されば、お山に登り始めるは九時ぐらいか。宜敷よろしく」

「じゃあ、叭羅蠶斗は家（貞観正國寺）で待っているんだな。寺に寄って奴を拾ってから山に行くって寸法か」

普肅が尋ねた。真今はパイプを消しながら応える。

「お見込みのとおり。

彼はお寺で品を用意し待っていてくれるはず。庫裏へ回り、本堂にて開帳願ってからその上で再出発となる段取り。

ん？ 品とは、なにかと云うことか。おや、話してなかったとは。いや、こりゃ失敬いたし候。しかし実は小生もまた詳細はよく知らないところ。ともかく叭羅蜜斗くんから聞いた方が確実なれば、今半端な情報を持つ小生が云々するよりか、貞観正國寺に急ぐがよほどよろしくもあると心得るが。

いずれ、時間を取ることはない。その後に予定も控えておるし、癡之家邸でベ裂くんが小生ら一行を待っておるはずゆえに。

諸卿も聞き及んでのとおり、お山へ登るゆえ、ベ裂くんも云々当家の斎戒場を清めおいて待つてくれているに相違なく存し候」

幻想的でしたらあった。白雪の礫が奔放 方向性もなく漆黒の中を荒れ狂うさなか、車内のこの空間は守られた暖かな静寂で（車輪と線路とがあたる衝撃音に揺れながらだが）突き抜けて行つた。

19:51 に到着

畝邨駅は龍谷よりかさらに寂しい。

駅に降りても廃墟のような、ベニヤ板の壁にトタン屋根の待合室と杭も柵もなく瓦屋根の門のような出入口があるだけで実際村人はどこからでも入れるし、入っている。夜は周囲に人家の灯火も見えない。家屋がまばらで雑木が繁つて深いからだ。電車は林のトンネルをくぐっているような感じだった。

猛吹雪の中、四人は意を決して車輛を飛びだす。氷礫の雪が視界をさえぎり、頬や鼻大や耳朶を切る。

競うように階段を駆け降り、箱の中に切符を抛り込んで路上にでた。

でたところは、駅前小さなベース、半径5mの舗装のそちらこちらが割れ、そこに萎びた草が荒んでいる。痩せ枯れ細った身にも容赦なく雪が積もり、力尽き斃れ伏していた。田んぼの畦道に繋がっている。

タールを塗った木製の電柱に街灯が割れた笠を震わせていた。

ハザード・ランプを点燈させ、ダッジ・ラムバンが停まっている。アメリカン・フルサイズで姿は大地に足を踏ん張る巨大な牡牛のようだ。遭難者が救助隊を見たような感慨が四人の胸に去来する。

窓を下げ、哥舞妓が顔をだす。色目で赤茶けた蓬髪、闇にぼくとぼふかのよう。

「さあ、こつちだ。乗りなよ」

肩をぶつけながら四人は乗った。

この車に関して言えば、真分には指定席があった。

内装は惜しげもなく金をかけられ、奢られている。シルクのカートンやクム産のペルシヤ絨緞、明るいカフェ・ラテ色のコノリー・レザー張イームズ・チェア、両肘附の足台附で各個独立型、回転するし、飾り房の附いた繻子のクッション、内装は赤みを帯びた明るいブラウンで木目が鼈甲のようなエルム材、一部が縞目模様も鮮やかな色彩の大理石、天井の角や縁には漆喰細工や金彫刻に似せた粉飾も施されていた。

真鍮製のアンティーク・ランプが室内灯である。

左側に列目、すなわち運転席の背後に真分は自分用のコーヒーテーブルと造り附の本棚を設置していた。本棚の下部に小さなロールトップが附いており、上げると中に抽斗がある。パイプ用具のセットがしまつてあった。真分は坐ると同時にパイプに葉をつめ直し、深々吸引する。

「いやあ、やっと人心地が附いたよ」

手馴れた手つきで普薫が後部座席の背になっている飾り棚からブランデーをだす。ボトルもグラスもバカラ社製だ。

「さあ、お祝いだ」

今日は旧暦の大晦日、翌日は旧正月であった。

グラスを渡しながら注ぐ。こんなことができるのも、車の内部中央に通廊があり、余裕を持つて左右に二席ずつが配されている構造のゆえである。普薫は最後に自分のグラスに注ぎ、「すまん、哥舞妓」と言つて助手席に坐った。坐り直しながら、ナビゲーション・システムのディスプレイを自分の方に傾ける。見なくともわかるのだが、副操縦士の気分になりたいのだ。

『天之哥舞妓』号は動き出した。

普薫の後部、真分の隣を空席にし、三列目に降臥と早蕨とが坐っている。早蕨もシガリ口に火を点けた。降臥は腰を浮かして一九五〇年代ふうのジュークボックスのスイッチを入れる。選曲はサッチモ、ルイ・アームストロングのクリスマス・ソングだ。日本の旧正月に、強かった時代の、まだ信じられていたころのアメリカの、クリスマスの雰囲気か空

気の中を躍る。たちまち塗り替えられる。かつてのアメリカの、家族四人のスキー旅行のような、往路の途中でJ.L.BENに立ち寄ってたくさん買い込んでまた出発するかのよう気分が醸しだされる。

「いや、バツハの無伴奏チェロにしてくれたまえ」

真々が振り返らずに言った。

「絶対合うからね」

確かに吹雪く景色と深くリラックスさせるバロック独特の豊かな旋律が妙にマッチし、ライトに照らされて闇に猛飛する雪礫がなぜか幻想的なスローモーションに見え、不思議な瞑想感覚に捉われた。

坂を登るときにはフライトのような感じに襲われる。深い林、古い巨木、その陰が威嚇のようであった。貞観正國寺の伽藍の、その豊のならばが做すシルエットが森から尖を突きだすのが見え始める。

降臥は他人の運転に身を任せると空想に耽るのが常であった。今まさに彼は古代の傭兵であり、軍馬の牽く殺伐たる戦車に乗り、一度確実振ることだけを目的とした全く実践向きではない斬首剣を使いこなして戦場を疾駆する非情の戦士であり、過酷な戦場に向かう途上であった。

これからぐる門は巨大、背徳的で栄華と繁栄の限りとを極めたバビロンの青き城門、猛く暴虐で高貴なる淫欲の女傑、女神イシュタルの門、これ自体が秘儀参入であり、異界への出発点なのである。

確かにその瞬間、山門の威容が見上げられようとしていた。目前四十五度の位置（運転席でハンドル上に身を乗り出して漸くわかる位置だ。降臥らは側面窓に頬を附ければ見えなかもしれない）、石段の頂点に聳える姿を現わし始めていた。

同寺はその名のとおり貞観年間に建立されたものである。元は法相宗であったが、一度荒廃し、室町の時代に真言宗を名乗り、金剛峯大為楽と称す僧が突如現われ、観世音菩薩が夢に現われ我に告げて曰く云々とかやよくあるパターン縁起で復活する。ただしその辺りの経緯は寺所蔵の巻子本に記載があるのみにて他一切なし。怪しうかな、限りなし。

20:02 哥舞妓は大きくハンドルを切り、貞観正國寺の山門へ上がる石段を迂回して通用門をくぐった。それは高麗門であった。

伽藍は近く見るとその陰翳が迫るように大きく大きかった。降臥は刹那に空想と現実との交叉を感覚する。が、庫裏の傍らに停まった途端に引き戸が開いてその幻妄が打ち破られ

る。

金髪に染めて一九七七年のジョニー・ロットンを思わせるスパイキー・ヘア、普肅の同級生、叭羅蜜斗が夜にもかかわらず丸いサングラスをかけたまま一同を誘導した。彼の名が摩訶般若波羅蜜多心経に由来することを顧慮すれば感慨深いものがある。

入ったところは竈のある十間、かまちで履物を脱ぎ、皆は冷え切っている通路を本堂へ向かった。

「さあ、早速ですまないな。こつちだ。用意してある」

「いやいや、さように気にするには及ばぬことかと。こちら既に軽く葡萄酒の蒸留酒で暖まっておりますがゆえ。」

いずれ、ベ裂くんもまた癡之家の屋敷で小生ら一行を待っているゆえ、急ぐ上に過ぎたると云うはなし」

降臥は暗く軋む板張りの通路を、叭羅蜜斗、真弓、哥舞妓、普肅に続いて歩くうち、までも幻惑に陥った。

敵が身を潜め隠れる洞窟を六人で進んでいる。降臥は五番目を歩いている。いきなり敵に直面する確率は低い。後方には早蕨がいるから背後の懸念も少ない。だが、けして緊張は解けない。わずか六人の戦士でなができようか。いかな敵に立ち向かえようか。

人を楯にしていくらかの安全を確保しつつも危険度充分でその適度のブレンドのぐあい心地よかった。非情、かつ無責任な心情ではあるが。

それもゆえなきことではない。

自己肯定の起源は自己の生存が保障され、充たされた安堵にある。それは逆に常に危険を、新たな局面を、総じて刺激を求めることと表裏一体である。降臥のような楽しみが魂の根底からわくことに不可思議はない。このことについての是非とは、問われるべきであろうか。だが、諸概念はその後にその便宜上、生まれたのである。しかし、だから是非以前である、と云うような判断もまた諸概念の本質である理叡性に基づいている（だから矛盾である、と云う判断もまた同様、理叡性に基づく）。

これに関する答を求めても不可能に陥る他ない。虚しいことだ。それよりか、尖頭の叭羅蜜斗が引き戸を開けると途端に吹雪の世界が侵入する。

そこは屋根だけで壁のない、風雪の狂荒する渡り廊下であった。そこを通わねば本堂に入れない。

叭羅蜜斗に続いて真弓が首をだした途端、すくめる。「ふっ」

哥舞妓がその背を押す。「ああああ、観念しなせよ」

そんな様子が普肅の肩越しに影絵のように見えているが、降臥の背後にいる早蕨の眼にも自分の肩越しにそれらがシルエツトとして映るつていのであることを想像する。通廊の梁の奥にある隅の暗闇の深さを眺め、少し震えた。

「ふつ、戸口の傍に来るだけで寒いや」 普肅が言う。

叭羅蜜斗は雪が積もる渡りをつかつか進んでもう本堂の引き戸に手をかけている。真分は小走りで一番猛風の真中を行くところ、哥舞妓は首を肩で護るように進みだし、普肅が顔顰め、一步踏み込み、降臥は覚悟を決めて戸をつかみ、早蕨が本堂までの距離を背後から目測している。

叭羅蜜斗が本堂に入ると一気に距離を縮めて真分が彼の背にぶつかると同時に飛び込む。滑らぬよう気を附けながらあまり足が床に接しないよう早歩きする降臥は戸口に到達しようとする普肅の向こうに戸に手をかけて欽びと寒気とに髪を振る哥舞妓の姿を見る。

早蕨がひたすら足下だけ眼をやり、走りだした。

普肅は普肅で、真つ暗と思いこんでいた本堂がほのかに明るいことに気が附く。

金火の蝋燭がいくつか点じられていた。白檀の香りも漂ってくる。金の装飾がゆつくり燦めいていた。

蝋燭だけではなかった。既に護摩壇に炎が揺れている。

天井から下げられた黄金製の天蓋があり、いく糸も垂れる光輪の荘嚴によって装飾される炎にたたらされるさかまは畏敬を呼び覚ますのであった。ちんと鳴る鈴れいの音が聞こえるかのようであった。

普肅の後から入った降臥も溜息する。

その後つから早蕨が「うぶつ、さ、やぶつ」 なんて言いつつ来る。

既に叭羅蜜斗はぼんやりぼんやり本尊の前、護摩壇の正面の座に近く、端座していた。側に寄って車座になるよう、真分も腰を下ろそうとすること。

さて早蕨が戸を閉め、蝋燭と護摩の炎との揺れる中、一同座るとその中心に置かれた物を眺めた。

叭羅蜜斗が口を切る。

「さあ、諸君らに見てもらおう。

これがそれさ」

哥舞妓が広げられたその紙を眺めながら

「ふうん、これが今日のお題目ってわけだ。

で、これがためになぜお山に登らなけりやならないんだ。よくわからないが」

普賢がささぎる。

「いいから、まず叭羅蜜斗の話聞けよ。見たところ、拓本のようだが」

真々も言う。

「そうさ。叭羅蜜斗、順を追って話してくれたまえ」

「まずね、全ては偶然なんだ。

俺が縁側でパール社製のハイハット・シンバルを磨いていたと思ってくれい。小鳥が囀っているんだ。呑気な冬の天気だね。こりや渋い茶でもやらにやなるまい、そう欲してか
なんの不都合のあろうものか。あるわきゃない。ないんだからな。

で、蒸籠竈に寄ったわけだよ。さあて、お約束、するつてえと、ふつと思ひほぐことがある。いや、なんてこたあ、ない。

実は天目なんだ。

先日だよ、海龍寺の住職がうちの親父を訪ねてきてな、大した用事じゃなかったらしいが、そりやあ置いといてだ、そんなときにお袋が茶を点し、だしんだよ、どこにあったのか、俺はちつとも知らなかったよ、天目茶碗だ。ちゃんと天目台も附けてね。

天目つて言やあ、禅寺に付きものつてイメージが俺としちゃあ、強かったからね。意外だったよ、我が貞観止國寺にあったなんてね。

それでだ、話を戻そうか。

俺はそいつを思いだして、よしこは一つ俺もそれで点ててみようか、まあ、作法が面倒だから普通に茶葉を急須に入れてそれでもよいからあの器を使ってやろう、つてぐあいに考えたのよ。で、しまつてある部屋に行つて収納棚を引き開けたんだ。で、裂に包まれた桐箱をだし、上蓋を持ち上げたのさ。

俺は気が附いた。

底が締まつた盞形、鼈甲^{さんなり}似の玳瑁^{たいひ}天目の斑文がおみごと、なんてことじゃない。龍形の型紙を使って附けられた龍文があつて龍大目とも呼ぶ奴なんだが、それをどうのこうの云
おうつてんでもない。

箱の中で碗を包んであつた和紙なんだ。

でね」

叭羅蜜斗は一同の中心に既に広げてあつたそれを指差す。

「この拓本がそれなんだが」

それは拓本であつたが、どちらかと言うと大昔の活版印刷に見えた。なぜなら通達石碑などの拓本は文字が白く他が黒い。大概原文は刻まれているもので文字部分は墨が着かず白くぼろものだからである。ところが眼の前の代物は活字で刷つたかのように文字が黒く他が白かつた。

いく人かはそれに気附くも、話の腰を折らぬよう直ちに問う者はいない。それよりか文字自体に眼が行つた。

真々がうめく。

「ううむ、なんと、これは」

普肅が片手で眼鏡の位置を直しながら顔を品に寄せる。

「サンスクリットだね、晰らかに。」

ちよつと待つて。

見たことがあるような、ないような」

降臥と早蕨とは話に全く附いていけない。哥舞妓もそうだった。腕を組んで頷きながらまふたは半ば眠っている。

普肅の言葉を受けて真々が少し笑いながら言う。

「もし完全に同じものを見たことがあると言ひ切れば卿は嘘吐きと謗られるよ。だが、似たものは絶対に無いはず」

叭羅蜜斗も首肯する。

「そうなんだ。これは」

普肅がうめく。

「そう。むしろ般若波羅多心経だ。しかし、少しばかり違つ。

シューニヤーン パシユヤティ スマ、……ううん。この後に見たことのない文字があるね」

「ふんふん。小生もサンスクリット語を読解できるわけではない。ただ心経の原文をそのまま音と形で記憶しているのみだ。ゆえに、ないはずの文が挿入されているらしい」とはわかるが、なにがどう余分なのか理解できぬことは卿と変わらない。

しかしまあ、今卿が指摘した箇所ばかりではないようだ。見たまえ。こちらは逆だ。あるはずの『ルー パム シュー ニヤー ター、シュー ニヤー タイ ヴァー ルー パム』十一文字が抜けている。

奇しくも、この部分は原文にはあるが、玄奘二蔵の訳からは削除されている部分に一致する。いわゆる『色空 空性色』などと訳されている部分だ

怪訝な表情で隆臥が訊く。

「それって、『色即是空 空即是色』のことではないんですか」

早蕨もつんつんと頷く。

「少し違ふ。説明しよう。

まず有名な『色即是空 空即是色』だが、この部分は唐の玄奘二蔵の訳ではこうなっている。

『色不異空 空不異色 色即是空 空即是色』

ところが元のサンスクリット写本を直訳するなら、こうでなければならない。

『色空 空性色 色不異空 空不異色 色即是空 空即是色』

玄奘訳は二段だが、現在一般に知られているサンスクリット写本では二段になっていて、そのように訳するのが原文に忠実な訳だと通常考えられている。

だとすれば、玄奘はなぜか初段の『色空 空性色』を省略したことになる。悪く言えば、改竄したのだ。その理由は不明だ。実際、意味が同じなので省略したと云う説もあるが、さように実利主義で判断して聖典をいじるものであるのか。

それからもう一点、玄奘訳はサンスクリット写本と異なる部分がある。

『五蘊皆空 度一切苦厄 舍利子 色不異空 ……』

と先ほどの節に繋がっているのだが、サンスクリット写本には『度一切苦厄』の一節がなく、『五蘊皆空 舍利子 色不異空 ……』となっている。つまりこちらは逆に原典にない節を付け加えているようなのだ。

さて、それらを踏まえて今目のサンスクリット写本を見たまえ。

もしこのサンスクリット写本に余分にある節が『度一切苦厄』と訳せるならば、どうにも玄奘の訳に合致する原典が存在した可能性も考えられるのだ。ただし、このサンスクリット写本の元となっている原本が玄奘訳よりも古いものであったとすれば、と云うことになるが。つまり玄奘訳に合わせて後世に捏造されたサンスクリット写本と云う可能性も検討されなければならない。

叭羅蜜斗、君はサンスクリットが多少読解できたはずだが」

「そうさ。この附加された一節もだいたいわかる。

これは『パーラ ミータ サ ルヴァ ドウフ カ プラ シヤ マナハ』と読

むんだ。そして『度一切苦厄』と訳せなくもない。

つまり玄奘が心経を訳したときに勝手に挿入したと通説されている一節 本来 原文にはなかったときれている一節に相応するわけだ。

もしこれが古い原典を持つのであれば、従来の学説は覆る。玄奘は勝手に略したり、附加したりしたのではなく、飽くまで原典に忠実であつた、と云うことになるんだ。

もしほんとうにそうならば、こいつは大発見のはずだぜ」

普薫が反駁した。

「莫迦言え、捏造ぞ。どうして今まで見つからない。少なくとも他に同じように訳した奴の訳があつてもいいんじゃないか、もしそうならば」

叭羅蜜斗が笑つ。

「なくはない。」

『度一切苦厄』と云う一節は玄奘以前の羅什訳にもある」

普薫が眼を丸くする。

「ほんとかよ。そりゃ知らなかった」

早蕨が口を挟んだ。

「あの、まだよくわからないんですが」

叭羅蜜斗が物憂げに言つ。

「いや、通常日本で摩訶般若波羅蜜多心経と呼ばれ、読誦されているものは、玄奘一蔵が唐の時代に印度（若しくはその附近）で入手した写本を基に中国語に翻訳したもので、実際に、それ以外の様々な地域、時代の人々が訳した、異なる心経がたくさんあるのだ。玄奘よりも二五〇年くらい前に同じ心経を訳した鳩摩羅什（通称、羅什）と云う人もいる。ちなみにさらにその二百年前に呉の訳経家で支謙と云う人もいたらしいが、詳細は伝わっていない。

で、結論から言うと、様々な心経の訳の中では『空性色、色空性、色不異空、空不異色、色即是空、空即是色』と二段で構成されるべき一節が、ただ玄奘の訳においてのみ、『色不異空、空不異色、色即是空、空即是色』となっている。そして現在までのところは、インドの原典を写したサンスクリット写本では、二段構成のものしか今のところ発見されていない。

そして『度一切苦厄』の一節が附加されているのは玄奘の訳と羅什の訳とだけなのだ。それ以外のどの訳にもない。

そしてその一節が記された原典も発見されていない。

だからと言って、未発見の写本が実はどこかにあるという可能性を全く否定できない。特に『度一切苦厄』の一節については、これが玄奘だけなら彼が原文にない文を挿入したんだと考えることもできるが、羅什にもあるとなると、もしや……

とか何とか、そんなところを前提にしていな、あるかないか、俺らはさつきから議論していた、ってわけなのさ。

どう？ わかったか」

早蕨と隆臥とが灯明に半顔照らされ、同時に首を縦に動かす。

「はあ、わかりましたよ、なんとはなく」

「結構、結構。それでよし。知って生活の役になるものでもないしな。ちなみに小生、個人的には『度一切苦厄』の一節こそが心経の面目と考えている。極端な言い方をすれば、一切の理論、諸概念を超えて無慈悲なまでに実践的、実存的なこの言葉の在り方こそ佛教の真骨頂であるよね」

真々はそう言った。

「はあ。ともかくもこれが今日の最重要ポイントと置いていってよいわけですよ？」

早蕨が重ねて確認した。叭羅蜜斗も頷く。

「そうだ。だが待ってくれ、まだ話は終わっていないんだ。

包み紙を解いて俺は読み、そして考えた。こいつは拓本だ。つまりどこかに元が遺存している可能性があるんだ、よね。

しかも見てくれ。この大きさだ。そして形状、なにかを連想しないか。

いや、実際、俺はすぐ思い附いたよ、あたりまえだが。俺はこの家で所蔵しているお宝系の品には大概、眼を通してしている。蔵で埃かぶりながらな」

護摩壇の炎が音を立てて照らすも、広い本堂は昏かった。

本尊が不動明王である。

不空罽索神変真言経や大日経にも叙べられたその姿は火の鳥、迦楼羅が背におり、火炎を吐いて不動の光背火炎を做す。右手には利剣、左手に繯索を持つ明王の両脇には、脇侍の矜羯羅こんがら、制吒迦せいたかの二人の童子が従えられている。

矜羯羅童子は色白く、賢そうに柔和な顔をし、胸の前で合掌している。穏やかな像である。制吒迦は肌が赤く、腕白そうな顔立ちで両手に金剛棒を持ち、構えていた。頭髮は仏の五智を表わすところ五束に結ばれている。

降臥は少し怖くなってきていた。後をつ振り返ったり、隣の早蕨と顔を合わせたりする。

叭羅蜜斗が傍らから木箱を持ちだした。蓋を取り、中の品をだした。

「おお」

一同ともに嘆息した。暗かったのでそれがあらかじめ置かれていたことにだれも気が附かず、見事な工芸品の出現に意表を突かれたのである。

「さあ、これが」 叭羅蜜斗が言う。「いわく附きの逸品だ」

漆塗りの平たい箱であった。そこに巧みに、非常に細やかに草書のような文様が螺鈿の象嵌によって象られていた。象嵌とは言っても、平滑ではなく、その象嵌の部分が活字のように浮き彫りになっている。それが金箔の破片を漆と練り込んで作った泥で描かれた円の中に収まっていた。見たことのない、奇妙な形式の装飾法であった。

「これ、もしかしたら」

そう言ったのは哥舞妓だった。叭羅蜜斗が応える。

「そう、鏡文字さ。鏡に写せば正常なサンスクリット文字になる」

普肅も呟くように言った。

「般若波羅蜜多心経だ。その田記」

「むろん見てのとおりさ」

「しかし、なぜ」

普肅が重ねて叭羅蜜斗に問う。

「もしもだ、サンスクリット文字を知らない人間がいて（いつの時代にも日本にはたくさんいたと思うが）、そこに逆から見られた拓本があつて」

「逆から見られた拓本ってなんだよ」

哥舞妓が差し挟む。

「通常、拓本と云うのは原本に接した面が、いわば裏面になる。そうでなければ、鏡文字になってしまう。サンスクリット文字を知らぬ人間が拓本の裏表を間違えて、それをそのまま原本としてこの象嵌を作ったとしたら」

哥舞妓が考え込みながら頷く。

「こんなふうになる、って言うことか」

だが普肅は反論した。

「いや、待てよ。だめさ。卑しくも螺鈿の象嵌だよ。黒漆塗りだよ。

そんなものを注文するような人間がだな、その程度の知識 若しくは確認もなく、こん

な金と時間のかかることをするだろうか。

わかっていて逆に作っているんだよ」

叭羅蜜斗は即答一発

「そのとおり」

哥舞妓が怒った。

「どっちなんですか」

「自分の頭で考えてみるよ。いいか、これは非常に贅沢な、豪奢な古物なんだ」
不服そうに哥舞妓が応える。

「そんなのあ、見りゃあ、わかります」

叭羅蜜斗が漆塗りの箱の蓋を取り、中身を見せる。

「見ろよ。この箱の中には硯と墨と、一種類の筆が入っている」
真々が見入る。

「ふつむ。まさしく文筆箱ではあるが」
普肅も見入る。

「だが、なぜ筆は一種類か」

哥舞妓はそっぽを向く。

「知りませんよ」

笑いながら叭羅蜜斗は

「臍を曲げたか。だが、少しは考えろよ。」

実はこの道具箱の目的が一つだから筆は一種類なんだ。

これは一種の活版印刷セットなんだ」

再び普肅の異議

「ちよつと待て、螺鈿の象嵌された蓋が」

だが、叭羅蜜斗は平然。

「そつさ、それがいわゆる活字の写植を済ませた版なんだ。だから鏡文字みたいなんだ。
わかったか。不思議でもなんでもない」

「じゃあ、これに専用の墨を専用の硯に磨って一筆で墨を塗り、写版する」

普肅が念を押すように言った。

「そつさ」

哥舞妓がうめく。

「信じられない。贅沢って、贅沢すぎるぜ」

早蕨が唐突に話題を変えた。

「いつごろの時代のものでしょうか」

叭羅蜜斗も腕を組む。

「ううん、それが一つ明瞭しやなくなつてなあ。

まあ、壺の購入よりは煎だろっからね、それにしてもこの手の細工だと、江戸初期か、そこいらだとは思っんだが」

普羅も言う。

「そう言えば、さっき因縁がどうのつて言わなかったか」

「言つたとも。そいつを今から話そうと思つていたんだ。

もしこれが未知のサンスクリット原典から写された般若波羅蜜心経、すなわち幻の玄奘版心経原典をルーツに持つものだとすれば、いのとうじろうやえもんのすけ 癡之藤次郎治衛門之丞の『真神国波瀾草丈史記』(明治時代の郷土史家)を思いださずもんじゃないか。まがみ

真神村で元旦恒例の真神山の火祭を行おうとしていたその夕暮れた。一陣の風のように現われた野盗の群れが村人を屠り、米と娘とを奪い、たちまち雪に被われていた山が朱に染まつた。天正七年のその日以来、真神で火祭は行われなくなった。

だが、話はむろんそれだけじゃない。若者も村長も神官も刃に血塗られ、斃れ伏すその中でただ一人無事を得て憤怒に明王のごとく猛つた貞観止國寺の住職西天が山頂までを駆け登り、蠱襲の磐から門外不出、秘蔵の心経を取りだし、それを唱えながら、身に火を放つとたちまち炎に身を淨して即身成仏し、赤龍に身を変えて野盗の群れを食らい尽くしたと云う。

俺の脳裏にはその秘蔵の心経と云う奴が引つかかった。つまり普通の心経しやなかったんじゃないか。そう思えないか。

で、仮にそうだとしよう。するとだ。

この地方には焼身成仏して即身成仏、みたいな思想があつて結局は火山信仰なんだが、詳細に研究すれば海神信仰とも奥深く交わつていて一様でなく、まあ、ともかく今それはさて置き、真神の火祭も根源ではこれと繋がつていて、この伝説の解釈は単に歴史的解釈のみでは読めないものなんだが、便宜上、歴史的事実と思われるところに限つて考察すれば、一定の方向が見えはしまいか……。

最初、俺の考えはこうだった。つまり火祭の中ではなにかを燃やし、神献する風習があ

ったんじゃないか。西天焼身成仏、の逸話にはそのことに対する潜在的な記憶が秘められてはいまいか。すなわち燃やすことを前提とした写本が既に存在していた。そしてその都度手書きで起すのはこんなド田舎じゃあ、大変なことだ。戦国時代や江戸の初期で写経ができるんならあ、一大教養だから。

とすればやや安易な印刷、と言ったって今のように簡易じゃない。儀式用に整った奴を、と思えば、塗って刷ってにも技がいる。だが、ともかくもだ。版があつて印刷してたんじやないか。俺はそうにらんだんだ。

とすりゃあ、その版木がどこかにあつてもいいもんだ。ってね。

で、この螺鈿象嵌が作られたんじゃないかと、そう思ったんだ。ただこいつは偉い贅沢品だ。いきなりしよっぱなからこんな席版を造つたとは考えにくい。これよりもっと原初的な、素朴な元版があつたに相違ない。だが、そいつはもう失われちまつたに違いない、ともかくも今はこいつが太元なんだ。って俺は考えた。

もうそつだとしか考えなかつたんだ。

ところが、真々に電話してみると全然違う展開が見えてきた」

「うむ、小生、実はかつて真神山に登ったことがあり、〃神体である真神のお山の、さらに精髓なる〃神体とされる贅衾の磐を拝し、また親しくイタルくんの遺蹟を訪ねて細心の観察考究を遂げんとしたのであつたが、そのとき吾や砂に埋もれながらも磐の面にサンスクリットのような、さよう見えるもののあつたことを、叭羅蜜斗くんから電話を受けしときふと思ひだして。

で、小生念のため、〃裂くんにも電話すると〃存知のとおり真神山とは贅衾家の裏庭のようなものだから、そんなようなものがあつたような気がすると言つ。

そつであるとすれば、風雪にも火にも負けない、文字どおり磐石たる席版となつていた写しがあつたと云うことにならんや。

もしきにあらば、その拓本を持つて行つて附け合せて確かめてやろう、併せて旧正月にこれを行えば趣も深く、佐ひあり寂ひあり風流、なものかなと、まあ、それが今日ここに参集していただいた経緯」

哥舞妓が手を打った。

「じゃあ、螺鈿象嵌の版は贅沢な飾り物か。そつでなけりやなんなのかよくわからんと云うことか」

しかし、叭羅蜜斗は即否定する。

「いや、そうでもないだろう。派手に装飾されてはいるが、飾りもんとは限るまい。祭祀用だから、神輿みたいなもので、飾られてはいても火祭のための実用的な品であった可能性がないとは言いきれない。原版の一つだったと考えるのはさほど間違っていないと思う。いちいち山に登って磐から採ってたんじゃ大変だからね。

里に置いてあつた方がなにかと簡便でもある。つまり本来はお山に登って採るところを時代とともに簡略化していった可能性もある。

だが、祭の中止とともにその用途と存在とは忘れ去られた」

普簫は深く頷いた。

「なるほど。だが、結局、歴史の本当のことは永遠にわからないのさ。たとえその事件を」の目で見てもさえないね」

一回溜息。

口を開いたのは哥舞妓だった。

「しかし、その事件はある程度、事実には拠っているんだろうなあ。正義の怒りとは言え凄まじい」

降臥も同意する。

「そう言う伝説を聞いていたような気はしていましたけれどもね」

普簫がまたも講釈を加えた。

「自己肯定の起源が広く本来的な意味で生存の保障と充たされた安堵とを欣求することにあるとすれば、単に自己の損失ばかりでなく家族、一族の損失にも同じ反応があることが推定できる。ゆえなきことじゃないさ。

人が自己の肯定を損なう者に向かっては命を賭して逆上するのもそれゆえであると観取されるね。

人が時に憤怒に駆られ、妄執に憑かれ、嫉みや憎しみによって自らの生身さえも引き裂く行為を犯すのはこのためであるかね。

ましてや同胞のための自己犠牲であれば一点の曇りもなく、その気志は神のごとくであつただろう」

暫時沈黙。目を覚ましたように真分が、

「さあ、遅くなった。急ぐ。行動あるべし」

と促すと気分が変わった。

「そうだ、さあ、行こう、さあ、行きましょう、行こうぜ」 皆心諾する。

震えながら本堂をでた。哥舞妓を先頭に庫裏を次々でると、拓本の入った筒を持った叭羅蜜斗は最後に戸締めし、真今の右隣に坐る。他全員が席に着いて雪や寒気を振るう間にも、哥舞妓はシフトし、ピストンに押されるコンロッドの運動が車体全体で感じられた。ダッジ・バンは旋回し、猛吹雪を再出発する。

雪は深く一色であった。

車は吹かれまくりながらも他人のように凍寂の中をサクサクと進んだ。

ヘッド・ライトに泛ぶ田舎道は半ば見分けが附かない。叭羅蜜斗もブランデーを口に含み、片膝立て雪を眺めた。雪礫にワイパーが負い附かず、ガラス面の曇りも混じって視界は狭い。それは暖かさの象徴でもあった。ほっと見つめていると現実感が乖離するのを感じた。

狭い畑の谷間を抜けて山を越え、椎やら山桃やらに囲まれながら蛇行する下り坂を終えると急に視界が開ける。白い平地に黒い板塀が長く横たわっているのが見えた。その背は再び山々で近く秀麗なのが真神である。

唐破風の大門は八脚門、両側が蔵になっていた。真神ぶうの松飾が設置され、鬼瓦にらむ。

門をダッジ・バンがくぐろうとするとき、トンネルに入るような感覚があった。早蕨はゆつくりと頭を逸らし、その暗い天井奥を眺めようとした。到底農家の造りではない。広い庭中には杜があり、白鳳時代の塚があった。

木々を抜けて車寄せに停める。

「さあ、上がってくれい」

哥舞妓は、裂の従兄弟だ。さつさとエンジンを止めると飛び降り、格子の玄関を開けた。

「べ裂、いるか。来たぞ」

厳つい老婆ができた。小柄だが、紅鶴と銀龍の刺繍の黒い着物で猛々しい。

「哥舞妓か。おるぞ。奥の二の間じゃよ」

「おう、婆ちゃん、ありがと」

哥舞妓は靴を脱いでつかつか広い廊下に行く。

「こんちわ」

普肅と叭羅蜜斗も辞儀をして靴を脱ぎ、上がる。真今は挨拶もせず、考え込みながらも靴を脱ぐしぐさだけは始めた。早蕨は辞儀する。隆臥は今玄関に入ったところだった。

普肅と叭羅蜜斗は哥舞妓を見失わないように、真今は早蕨に促されながら、隆臥はそれ

に追隨して行つた。

二の間は襖で仕切られた土一畳の部屋だつた。

へ裂は床の間を背に正座していた。大きな木株で作つた卓が置かれている。「よう、来たな。まあ、坐れよ」

皆坐り、先の老婆が来て茶を入れてくれる。へ裂が言つ。

「皆それなりの用意で来てくれたようだな。まあ、早蕨は仕方あるまいが。念のためこちらでも着替えや靴やらを用意しておいた。もしよければ使つてくれい。それからすまないが、適宜この荷物を分担して負つてくれまいか。いや、それは重いからお山に慣れた俺と哥舞妓とで背負おう。そうです、叭羅蜜斗くと普肅くんとは、そちの奴をよろしくほら、一番不慣れた隆臥、早蕨はこいつを頼むぞ。真分はそれ。お主はお山はこれで一度目だからな。」

さて、よいかな、皆の衆。

最初は倉場で沐浴してもらつ。安心していただこう。幸い我が家には天然の温泉が湧出している。それで禊してもらつ。

知つていようかもしれないが、裏庭にお山への奥の大門がある。裏と言つて、この家が前衛、真神山の拝殿にあたると言つのが正しいが」

それでも倉場まで雪の中を歩かなければならなかつた。檜造りで松皮葺の屋根を持つた小屋だつた。灯明があり、湯気が小窓から洩れ、風に散っている。へ裂は一拝してさつさと脱ぐと浴び、烈しく風邪の抜ける脱衣所で手早く登山の支度を始めた。哥舞妓、真分がこれに続いて浴びる。普肅と叭羅蜜斗とは震えながら脱ぐ。隆臥、早蕨は漸く一拝。

「しかし、おかしいと思いませんか」

早蕨が隆臥に問つ。

「なにがだよ」

「さつきの話ですよ」

「活版印刷か」

「いや、それじゃなくて」

「違つての？ どれだよ」

「ですから、自己の肯定を損なう者に向かつては命を賭して逆上する、つてあれですよ。変だと思いませんか。自己を肯定し、自己の生存を護る。身を裂いてまでも遂げようと欲し、そのために自己自身をささ滅ぼしてしまふんですから。おかしくありませんか」

「それよりか早く浴びようよ。寒い」

ベ裂は早くも着替えを済ませ、外へで靴紐を締め直していた。哥舞妓が着替え終わるところ、真分は上がって着替えを手にする。普肅と叭羅寧斗とはまた湯の中で桶に汲んで頭からかぶっていた。

各々用意された懐中電灯片手に雪を踏んで裏庭を進む。竹を編んだ華奢な垣根にぶつかつた。その向こうは水雪が空を切り、山の木が騒ぐ音でいっぱいになっている。一箇所小さなゲートが着られ、桧板葺の屋根が附いていた。

「これが大門だ」

ベ裂がかかと笑って見せる。だが、後は黙し、電灯を置いて二礼二拍すると漆黒へずいと進んだ。途端に木々が吼える凄まじい音が襲い、それ一色となつた。

21:00 一行は山頂へ向かつて出発する。

先頭は案内役のベ裂、次が一度登つたことのある真分でその後が品を背に巻きつけた叭羅寧斗、次が普肅、隆臥、早蕨、最後に彝々家の親戚、天之家の人間としてベ裂同様にく度も登っている哥舞妓、と云う順番だつた。

最初はまつすぐ登る無様な石段だ。無様と言つのは殆ど自然状態で全く整つておらず、あちらこちら缺けているし、大きさも形も凸凹だからである。幅は人間の肩よりか少し広いだけで却つて歩みの妨げであつた。実際、よく照らして確かめながらでなければ踏みだせなかつた。

やがて石はなくなり、獣道同然、斜面もきつくなり、道はジグザグに登つて行く。頬を切る氷雪がさらに厳しくなり、フードを深くする。息が切れた。早蕨は暗闇を照らし、超然と登つて行く尖頭のベ裂を、隆臥の肩越しに見える普肅の頭の向こうにある叭羅寧斗の背中越しに視野に入る真分の帽子の陰からちらほらと垣間見た。怖くないのだろうかと考え、雪山遭難者のような気分になつてくる。後ろを振り返ると哥舞妓の姿がなくなっているのではないか、などとこんな低い、人里近い山ではあり得ない不安の感情がふつと過ぎる。

実際、振り返れば哥舞妓が黙々と歩を進めて登っている姿があつた。毛糸で編まれた彼の帽子の尖の向こう、かすかに彝々家の灯火が見える。あれは墓場か。

木の枝を払うと鞭のようになって戻る。積もる雪が踏みしめられてきゅつきゅつと云う。その音はしかし風にかき消され、わずかにしか聞こえてこない。暴風の太音響の中、自分の足場が曖昧になり、喪われて行くような錯覚に襲われる。手足の存在が失われ、熱

に浮くような直立したい、虚無の幻覺に陥りそうになる。均衡が崩れ、確かさがどこかに飛んでしまった。さような状態は気の迷いに過ぎぬと理性で思いながらも、諸概念には生存の根底から湧き上がる現実の不安を払拭する効力がない。

どれほど登ったであろうか。空漠とした夢想から醒めたのは大きくて厳たる障壁のためであった。

岩場を攀じ登らなければならない場所にぶつかつたのである。ベ裂が厚い手袋を手渡しな意味が早蕨や隆臥にもわかつた。

指の力と足場を探す勘とを頼りに、岩にへばり付き、身を振って躡るように登らなければならない。ベ裂がまず慣れた身のこなしで最初の二mの岩を登る。その次に三mの蟹があり、その後は一m程度のが二つ三つ続くだけだ。ベ裂が二つ目に齧り付き始め、真々が一つ目の岩の、手をかける位置をたしかめ始める。早蕨はベ裂から眼が離せなかつた。二つ目の三mが最も危険なのは晰らかだ。大きく、かつ自分の頭を踏むくらいに屹立していて難易度が高いし、転げれば殆ど足場のない最初の二mからもそのまま落ちることになるに違いない。かなりの落差になる。最悪の事態も想定できた。

だが、ベ裂は難なく二つ目をクリアし、軽々と三つ目の小岩群を跨いだ。

真々が登り始めながら言った。

「見かけほどは難しくはない。しかれども、雪ゆえに相当滑りやすくなっているし、視界も悪いし、十分に注意をされたい。」

さて、驚しあれ。小生はベ裂のようにはうまくはない。さにしあれども、却つてそれが卿らの参考にならんや」

ベ裂の三倍ぐらい時間をかけて真々は登り切つた。かなり必死だつた。哥舞妓が言う。

「さあ、叭羅蜜斗くん、手がかりのポイントは、見えますか、あれと、それから次が……」

・」

早蕨は怖くて岩に附いた雪に頬を擦り、濡れるも構ふ余裕なく、風の音も聞こえず、周囲も見えず、懸命にしがみ附いて筋肉を震わせ、身を振つて肘や膝を岩層に蹴り登つた。

三つ目の岩に着くころには、その低い岩を登る力も果て、ベ裂や叭羅蜜斗に腕を引く張つてもう始末であつた。

登り切ると隆臥が融けた雪に尻が濡れるも構わず、へたばりしゃがみ込んでいた。早蕨も倒れるようにその隣に坐る。

「はあ、参りましたね。帰りはどうなるんですか、これ」

ベ裂が快活に応えた。

「登ったのと同じように手探り足探りで下りてもいいが、ずり落ちるように滑降するのが一番楽だな。大した高さじゃないからな。服が汚れたり傷んだりするのを気にしなければどうってことはない」

そこには一本の楠木があった。大変な老樹で幹が太い。いつの時代にか折れたせいか、高さは高いが幹に比するときほどではない。その代わり枝が楠とは思えないほど広がっていた。巨大な盆栽のようだった。

早蕨はしばらく立てそつになかった。深夜、この天候である。慣れているベ裂でさえ疲労の色を見せていた。

哥舞妓が提案した。

「もう一時間ほど登っている。ちよつとこの磐棚が山登りの中間だよ。場所もちよつとい

い皆が息を切らしながら、休憩に同意した。厳しくもどこか暖かみのある土嚢を漂わせるその老木に自然とだれもが眼をやった。

真分が言う。

「これが太白老叡の楠。

見よ、この翁の風格、泰然たる様相を。これぞ真に叡智と云うもの。時間性は累積する。歲月が重なり、より濃くより深く熟成し、そしてより軽らかに変ずる。人が言葉と云う記号を組み合わせて捏造する論議など、智慧と云うに足りない。一瞥しあれ、これこそ真に、実在する、現実の叡智である。

人間の叡智などいかほどのものか。いかほどの実在性があるのか。ゆえに智慧なき者には世界は摩訶不思議に見える。そう、確かに存在はマジックだ。それは実在する叡智であるがゆえに。

老木や古りにし磐に歴史の醸す真実があるのだ」

ベ裂も普段見せぬ、思いに耽る表情で言った。

「少年時代には親に内緒でよくここまで登つてこの大老にいろいろ打ち明けたり、相談したりしたものさ。幹に触れればその答えが温もりから伝わってね。

お主らには愚かに思えるかもしれんがな」

普肅が顎に二指をあてて考え深げに言った。

「いや。欧州でも森林とともに暮らす部族には幼少のうちから森の中で気に入った木を友

とする風習があるとなにかで読んだ記憶がある。

それは癡之家の習いなのか」

「そうでもない。だが、祖父などもそうしていたと云うから、太古にはそう云う伝統があったのかもしれない。それが体質の中に残存して自然さうなるか。

人間存在もまたこの細胞の一つ一つは歴史の累積だからな。その積み重なった層が昇華して自分を含めた世界全体を構成し、その世界としての現実存在である俺を、俺の心情俺の意識として現象するのかもしれない。

俺らは否定しようもなく、歴史的世界的存在なのだ」

「そうか。そして全体的存在でもある」 早蕨が急に声を上げた。

『どうした』 隆臥が尋ねた。

「わかったんですよ。どうして自己肯定を欲すことが、自己の生存を護るべきはずの衝動が自己を滅ぼすまでに烈しく昂ぶるのか。自己保存の意味が一つの細胞の保存の意味であり、その目的が人類として種全体の保存にあると仮定するならばどうでしょうか。矛盾は解消します。

自己保存の意志は累積の一片にすぎない。つまり自己保存は種の保存の一片なのです。

大元の意味は種の保存なんです。

だから、愛する者を護ることがより深くより大きく種の保存に繋がると直感される場合には、それが優先される。子孫や家族や部族や国家に対する自己犠牲など、その勘に基づいているんでしょうね。人は種の保存のためならば、自己一身を滅ぼすことを全く厭わないように構築されているんです。だから人は崇高な自己犠牲的行為に対し、先天的に崇高性を感じられるようにできている。

けれども、その本能が的外れな方向に行く場合もある。それが尋常ならざる嫉妬や逆しまた憎悪なんかなんでしょうね。

ともかくも僕は全体で一つの維持すべき生命なんです。これは人類にあてられた晰らかな命題です」

真々が立ち上がりながら雪を払った。

「そのとおりではあるが、それが真実の全体ではない。

さあ、先を急ごうか。当面の現実存在は、この登攀にある。

こんなお山でも絶対遭難しないとは言いい切れない。様々な事故を顧みられよ。生死は運が決す」

再び順に一列に並んで一同は登り始めた。

蟻が多くなり、巨石を迂回するような蟻の迷路を行くように進み方になった。

「なぜ真実の全体ではないんでしょうかね」

早蕨が降臥に小声で訊いた。風雪に紛れてよく聴き取れず、

「え、なんだって」

「さっきのことですよ、真谷さんに僕が言われたじゃないですか」

「ああ、それか。よくわからない。私は今、自分のことを考えていたよ。世捨て人は人間存在の本質から外れているのか、とね。」

だが、私には人間が捏造した『社会』という空栗の、『ここ』からは鹽味をなくしたんだ。聖なる賢者、仏陀だって出家を推奨しているじゃないか」

踏みしめ、顔にかかる雪を払いながらも、頬と鼻大に感じる礫の痛みと漆黒、体にあたる木枝の鞭と風の轟音と、それしかない。雑木をかき分けながら早蕨などはせいぜいと呼吸も荒く、疲労困憊し、勾配を這うように登る。やがて斜面に段があることに気が附く。降臥が言った。

「これは」

「え」

「いや、感しないか、早蕨。足下がまた右段になっている。違いますか、普羅さん」

「それよりか、気を附けろよ。こっちだ」

唐突に進路に現われた、白くて滑らかな磐を迂回するところが頂上であつた。高層ビルディングの屋上にあるヘリコプター発着場のようで木がなく、敷かれたように右が平らかに横たわり、山頂に置かれた神棚のようでもあつた。鳥居が立っている。氷裂がその先を懐中電灯で照らす。

偉谷があつた。サンスクリット文字の『I』のよう縦に屹立する巨大な立磐。高さは約二〇m。磐には上から下まで雷霆のごとく、巖龍ノ裂、略して巖裂と呼ばれるIの字型の大亀裂が入っている。注連縄がされていた。吹雪に曝されて動せず、雪をかぶって聳える姿は廠かで畏怖を呼び覚ます。足から力が抜けるような、その場から逃げ出したくなる底知れぬ恐怖であつた。早蕨は学生時代に富士山の側を夜、車で通り抜けたときに見た、星王の半分を蓋って迫るように黒い山谷の、人間に比してあまりに巨大な存在に生存の根底を揺さぶられるような恐怖しきを感じたことを思いだした。

「凄。怖いですね」

早蕨の言葉に隆臥も頷く。

「古代の神の前に立っている気分だ。まるで睥睨されているかのように感じるよ」

「俺も真夜中に仰ぐのは初めてだ。威圧の気がある」

ベ裂さへもがそう言った。

磐はそれだけで充分に神威で懼るべき存在感があったが、彼らの胸に去来したのはそれだけではない。だれ一人敢えて口にできなかったが十年前、この磐に攀じ登り、体に火を点けて飛び降り自殺した十七歳のイタルを思っていた。狂執的な人間で、数々の奇行の末、自ら神的存在とならんとしてエンペドクレスのように死んだのだ。

沈黙の後、真分が言った。

「存在というのは単に空間を占有しているだけのものではないのだ。磐には磐の冷厳たる観智がある。それは人間の諸概念にはあて嵌らないものだ。それゆえ冷厳な他者性として迫る。」

巨大であることは単に大きいのではない。それ以上のなにかがある。見よ、物性のそれは不動だ。それゆえ生と死との狭間に揺るぐ小生ら人間に根源的な畏怖を与える。不動性とは意のままならぬものの象徴だ。それは微塵の憐憫もない他者性の権化として映る」

哥羅妓がそんな科臼にお構いなしで声をかける。

「さあ、あと一時間ほどで新年だぜ。例のものを確認しようさ。真分、ベ裂、どの辺なんだよ」

電灯で照らしながら見上げて普薫が呟く。

「近附くのが怖いようだな。真分の言うとおりだ。古代人が宗教心を持った起源の一端がここにあるような気がするよ」

叭羅蜜斗も、「ああ。存在って厳かなものなんだな。そう思えば、今こうして生きているってことも不思議に感じる。」

しかし、神罰があたりそっだぜ」

それでも彼らは進んだ。

ベ裂と真分が並んで指差しながら照らし行く。

サンスクリット文字のようなものが彫ってあったという場所はすぐに見つかった。

「いいだ、これ」

ベ裂が照らしながら指差す。真分が手袋をした手で雪と下の苔や泥を払い落とす。彫り込まれた文字のようなものが朧に泛び始める。輪郭は風雨のせいか、いくらか磨耗が

見られた。

「ふん、そっだよ」

真々が顔を近附けて検分する。殆ど鬚が触れそうなくらいに。早蕨は血文字の痕を調べるシャーロック・ホームズを聯想した。

「せっかく持つて来たんだ。照らし合わせくれよ」

叭羅蜜斗が拓本をだす。普薫が持参の折りたたみ傘をだし、烈しい風雪から守る。皆が風防になるかのように寄り固まる。まるで冬の厳しさを凌ぐ日本猿の群れのようなのだ。

それは間違いなく、梵字による般若波羅蜜多心経、玄奘三蔵訳に合致する、知られざる写本版であった。

風に吹き消されて聞こえない溜息を皆が吐いた。暫時の沈黙。

早蕨が口を開いた。

「しかし、結局このことはなにを意味するのでしょうか。いったい、いつの時代に彫られたものでしょうか」

叭羅蜜斗が振り返り、眉を顰める。

「それがわかれば俺たちは今ごろ学者だよ」

まあ、世界レベルで言えば石の削り痕から時代を推定する研究者もいるようだが、到底俺らにわかるものか。

この真神で、いつ、だれが、どんな理由で、この神域にこれを彫ったのか。想像も付かんね」

普薫が言う。

「まあ、普通に考えれば、真贋のいずれかに関わらず、玄奘が心経を持ち帰った以降と云うことになるか」

哥舞妓が頷く。

「なるほどね、確かにそうかもしれない。だが、羅什の時代ってことも考えられないのかな」

叭羅蜜斗が継ぐ。

「あり得ない、とは言い切れないな。或いは支謙の時代ということも」

普薫が反駁する。

「待てよ、そのころ日本がなに時代か考えてみよう」

隆臥がおすおすと言う。

「しかし、その時代がどういふ様子であつたかは、実際には見でもない限り、絶対的にはわからないはず。資料がないからと言つて、なにもなかったとは言ひ切れない」

早蕨がだれにもなく、言つた。

「いずれにせよ、本当のことはわからない。僕らに与えられるのは、学界の勢力圏内で優位だつた説だけですから」

真々が漸く顔を上げた。

「小生らの知識なんかすべてそんなものではないかね。いったい、小生らは地球の自転や脳神経細胞間を、伝達物質を媒介として伝わつて行くインパルスを、自分自身で確認したことがあるのかね。多くの知識は受け売りだ。

古代人は迷信を信じた。有識者が教えたからだ。社会の通説であつたからだ。小生らもそれとどこが異なろうか。

小生らは実際大したことは知らんのか。それよか、磐の語るロゴスに耳を傾けよ。いく許か、小生らの直観するところ、より直接的な小生らにとつての現実、清濁混ざりながらも学としてよりかより小生らの感情に密着した、名状しがたい深い感慨、たとへ説明不能であつても、仮に見たものが信じられなくとも、わがちがたく離れがたい、実存する知識が得られる。そうではないかね」

フードを剥いで叭羅筆斗が荒れる風雪に聳える磐を見上げた。

「こいつはだれにも見られなくとも神威と立ち続けるんだろうな」　そう言つてから刻まれたサンスクリットを見た。「これもまた、だれにも見られなくとも存在し続けたと云うだけでその意義を充たしただろうか」

蒼鷹が顔を蹙めて鼻夫の下を指で擦る。

「そんなこと、俺たちにはたしかめられんさ。いつもあるのは俺たちの思い込みだけなんだからな。真の答なんか探せない。探し方がないんだ。真の答と云う設定自体がないのかもしれない」

「けれど」　哥舞妓が割りと平坦な声で言つ。「イタルくんは信じたんだろうなあ。そうでなければ、こを死に場所を選ばずがない。この磐の上からこの地面に飛び降りたんだ。しかもガソリンをかぶつて燃えながら。

たぶん、死ぬと云うよりか命を極限まで燃焼させたかつた、そんなう癡想だと思つけれども、よくもわるくもただ凄いとしか言えない。そこまでやると、その選択はもう人を黙らせる。もう善悪の彼岸にある」

いつのまにかベ裂が背負っていた荷を解いて中から三つ折の板をだし、言う。

「おい、哥舞妓、そつちのもだしてくれ」

「へー」

そう言つて戸惑いながらも哥舞妓が荷を解くと中から同じような板がでてくる。

「さあ、アルミ製の管があるだろう、哥舞妓、それもだしてくれ。こつちの板と繋ぐんだ。そつち、接続できるようになっているのがわかるだろう」

ベ裂が板に管を嵌め込むと卓袱台のような脚の短い簡易テーブルが現われた。さらに彼は背囊から缶詰を次々と出す。

「俺たちの袋はなんだ？」

普肅がそう言つて開けると紙パック入りの日本酒がでてきた。「上出来だな」

降臥のリュックからはタープが、早蕨からはロープとカーボン製の細い支柱が、叭羅蜜斗のからは皿とフォークと敷物とが登場する。

普肅がフードを外し、頬を打つ髪を噛みながら唸る。

「真夜中の晩餐だ。いや、饗宴シンガシオンだな」

岩と岩との隙間にどうにか支柱を立ててロープで固定し、広げたタープを四十五度に傾斜させて張り、殆ど気休めの風除けとする。

ベ裂もまたフードを外して暴風に髪をなびかせ、腕を広げて呼びかけた。その右手に剣か聖典か王杖でも持たせてやりたいような身振りだ。

「さあ、各々方、席に着いてくれい。暮迦かと思つたろうが、ここは一つ古代からの真神の宗家である、整之本家の俺に上座を持たせてくれ。神意を慮ればこそだ」

真分と叭羅蜜斗とが口をそろえた。

「異存はない」

普肅はどうでもよいとなうふうに頷き、降臥早蕨は口をだすところではないと感して敢えて意思表示しない。一同は一面を庇護するタープを背にしてUの字型に卓を囲んで坐する。酒が廻る。缶詰が開かれる。鯖にコンビーフに鯖に焼き鳥などなど。ベ裂がビニール袋から茹で蟹とスルメと昆布とをだした。シートの上に坐ったのはよいが、だれも注がれた杯をつかむ右手が震えている。だが皆、剥ぐようにフードを外す。だれもが一様に野蠻な気持ちになつていた。そして真分がフードの下に無理やり折り曲げて例の帽子をかぶつていたことを知り、一斉に嗤笑する。

「さあ、乾杯しよう」ベ裂が言った。

「はん。まあ、なんでもいいが、しかし、なにに乾杯なんだ」

叭羅蜜斗が冗談半分に突っ込んだ。

「いやもう、こうなりやなんでもいいし、関係ないや」 哥舞妓

「そうは逝かん。逝くものか。一つ厳肅に」 普肅が胸を張るように姿勢を止す。

「では、なににするか」 再び普裂

真々が真顔で応えた。

「年改まるこのとき、イタルくんの復活。その永遠に祝杯を捧ぐるべきではなからうか。

諸卿、いかがか」

「それはどう云う意味でしょうか」

と早蕨が言えは、ささぎるは叭羅蜜斗。

うだうだいなよ

「トーク・イズ・チープ」

「さあ、早く呑もうさ」

哥舞妓が風に抗い叫ぶ。降臥が顔を顰めながら雪まみれの手袋の手で眉毛の雪を落とし、

「屋上ライブをやっているビートルズの気分ですね」

「『ゲット・バック』ですか」 とは早蕨

「意味わかんねえよ」

哥舞妓が笑いながら怒鳴る。真々が言った。

「さあ、各々方、よいか、乾杯しよう。発声は叭羅蜜斗くんできろしいか」

同意を待たず叭羅蜜斗は天に向かって吼えた。

「よっしや、乾杯！」 一同呑み干す。

「聖なる夜。山上の雪風」

吟ずるがごとく真々が謡った。

「なんか、燃えてきますね。気分いいですね」

早蕨も唇をぬぐいながら言う。皮肉な笑みを浮かべ、普肅は煙草に火を点けようとしたが、風雪のため断念する。そして言う。

「戦士は顧慮しない。

ペリクトスの時代に生きた古代ギリシアの人々は常軌を逸した、溢れ漲らんばかりの剛胆を賞賛した。

勢いのある時代はそんなもんさ。俺たちだつてたときは、一九六〇年代を理論的に批判をすることはできるが、その魅力に抗することはできない。トルストイが彼の主著で開陳

した歴史哲学に眉を顰めることはできるが、あの壮大な物語の中に現に生きて憂悶し、悦び憤り感激に及ぶ、息衝く人間たちにリアリティを覚えぬことはできない。それと同じで、生命の横溢の前ではまっとうな論など抹香臭くなる。

答なんかがあるものか」

べ裂が腕を組み、尊大に構える。その横顔はやや冷厳でもあった。

『謂わば『葉隠』精神だ。武士道は死ぬことと見つけたり、図にあらぬを大死と言うは上方ふうの思ひ上がりたる武士道なり。そう云うことか』

普薫がそのにらむような眼差しをより硬くする。

『プレゼンスさ。存在するものは無慈悲に、傲然と聳える。無表情に、一片の憐憫の情もなく、ただ即物的に、一向心情を解することもない物質的な非情性で存在する。その精神に私欲はなく、全く客観性である。それは懦弱ではない。一つのFORCEだ』

早蕨が俯きながら、地面を怯えたような眼で見ながら、

「こんなことを、人が死んだ場所で言い合うなんて、なんか怖いですよ。

先輩たちが言う真実が、たとえそれが真実であつても、現実的にはだれも受け入れられないことじゃないですか」

『そうだな、早蕨』 隆臥も呟くように言う。『だが、それだから人間は生き続けようとする。だれもが納得できないから。終われないんだ』

真々は髻に背を向け、吹雪に顰められながら言った。

『確かにそれは存続の原理ではある。むしろ存続を現象させるために仕組まれた絡繰りだとも言えるかもしれない。そして存続とは必ずしも物理的な存続や精神的な存続、または形而上にあるイデア論的な存続を指すものでもない。敢えて毒杯を飲んだソクラテスは肉体が死しても魂は不死であると考えたようだが、神秘主義的に魂が存在として在り続けると考えたわけでもない。と小生は思ふ。』

彼は悪法であつても法は法である。と人間理性で判断し、自ら死刑を受諾したのである。と。その行為自体が真実であり、魂の永遠性だと考えたと思ふ。その意味ではイタルくんの遺伝子もまた絶えたわけではない。たとえ小生のような理解者がいなくても、解釈されることも再発見されることもなくとも、だ。

たとえ彼の行為が誤りであつても。

よいかね、早蕨。

人が異性や子孫への愛のために自己を犠牲にするのは生存の法則に矛盾しない。生存は

種としての存続を求める。固体としての存続はその手段ではない。そこまでの思料は正しい。

だが、もう一步突っ込むべきではないかね。いったい、君には小生ら存在者の存在が種としての存在を継続することを志向するだけに見えるかね。様々な人間の様々な奮行、異常な、破滅を欣求するかのように過激に走ろうとする行動を見ても、そう思ふのかね。

存在する者は身を破つて現在とは違う新しい現在を求め、常に今の自己を超えようと欲する。

すなわち保存・存続しようとする欲する志向の本質にあるのは現在を超越することであり、脱自的であること志向することにある。

種としての存続しようとすることはその一属性に過ぎない。種として超越し続けるには、種として存在し続けることが条件の一つであるから、存在し続けようと欲するのだよね。

この運動は物質的ときと言つてよい、現実的な真理、真実だ。だとすれば、人が自己偏回を越えた超越的行為にしばしば天を舞うかの高みの恍惚を感じるのは当然ではないかね。

たとえば、死ぬことと見つけたり、とただ言い切る『葉隠』の精神に。

今宵の奮行の真奥に肅としてある静寂、地上の情に意を留めることなく、蒼穹に身を躍らせる龍神のごとく清爽たらんとすべし。さればイタルくんは身を裂き死す」

遂に時刻は0:00を廻り、新春が大磐の周囲を檜の香のごとく漂つのをありありと観た。あの刹那のことは、今はもう老樹の呼吸のよう深く幽かでしかなかった私の記憶にも、時折発火のよう鮮やかに甦る。さればいつして風雨に朽ち行く墓碑銘を眺めるときなど、今さらながらこんなふうになったことを不思議に感じるのであった。